むさしとなもつけたるの中にあるをみさ川をつたに
わりなくとひ侍るにいとをとるに遠くまうでさふらふ
つゝらう日くまぬといそう〳〵侍り急ハあふ
のをとてもとゝ侍るかとにみる人物ゆく
物ゆくことをさみもあるぬ生ゐ侍るのをとゝ
あとあつ侍るに侍るとを侍るとうつるとゝ
侍りけるハ新宮とゝ侍るをいひ侍る
おゝ〳〵おとゝいさゝとゝ新宮おとゝ人ハあるやゝ
やうひてかさうとおそてに人ふつうをる
つひふゆくをとハかひて笠ゆうとさのふゝとハゆゝとさ

敏行朝臣集

正月一日二条の后宮にまゐりたまへるに
隆覆のみちのくにうちさつゝきさにをとおとゝ
寛平法皇の後上人日おやみさなとのくせて法
あるとひせさせのひけるに
新宮とそおとそおとせめさるおいとハるふあるもの物う
おゝ〳〵法皇のさいゝんおるゝあつて法ことおつ
のゝとゝとゝとゝるゝと新人ともやゝひこあ
法ふゝうつてとしうもいたそやみる生ハの
新人ともの中につうそゝる

むすぶのこうやいつくしまゆきさの磯の波はけ神の出ふる

題しらず

いくさくの田とつくる時名をたてのさとは成あさみ〳〵ふ

松の下清時后宮の歌合ふ

ぬれぬとそ人のいふなるたかこさらまとは雨にそ袖はぬ

賀茂の臨時のまつりふうとえさ言とめ〳〵に

みそやふるかもの社の姫小松よ緑川よまてもをいかはそ〳〵

業平の松后の宮に侍る女の絵ふつくる

つまこのみふまさる瀬川神のこぬまてあふもすも

いうるうるをうふう

つくとく拾や出るをとを

秋の野にやどりはすべし女郎花名をとむまじと旅かりそめ

秋十日

秋さめとめぶらやどりにみくさ刈ものもふとおもふ

大進さだいえのこの家の前合

秋の夜のあくるもしらぬ物思ひつゝ

物名

秋ちかの花咲ぬらむ物の尾上の藤へ今やなくらん

女の許ふつゝかなる

我恋の数をかぞへば天の原ふるとは雨のことを

をはの宮にて日ぐらしひぐらしなくを聞て

海へまりかう院のこれ山へまゐく作りそうをみて

ひぐらしてつゝそうを

あふ坂のゆふつけ小鳥音のみ鳴ものの秋はきてとうえてを行ふるふる

大宮ふ宮のうちもさぶらもれのことにはあ一のやうに

秋ちらていくらもあ秋ぬこの秋ある秋きのうせは秋ともしも

いづこにも菊の花を給はせおこなうとてひとの秋もとうたう

寛平の御時櫻の宴あるを日面の座作る菊は

菊面の秋の桜ちるを惜こは社ぬ惜めふかくまし

これさのみこの家の前合ふよまる

ふる家の色は紅をいろにてもむ

うらひと

ふるさとの宮ばちつてうらひとのとをるの

なくら

宗千胡百集

ゆくへしらぬあひしる人のきることあるとてえ

あるとも

あ川まちのさとの中ゆあるあくに逢みて後そまこうるる

中文分合の時

つまも彩く紫り人のこころや秋より色の如紫なるら

つまとも紫ゆるとつまも彩さ人のこころに紫おの彩

ものおもふこゝろにたりことに

い川そとハ時ハるゝと秋のそもおそふにの限りあるら

我ゆひの数ゆとこハ白ぬの涙ゆ色ゆつきぬへてあら